

福祉教育における「グループワーク」導入の試み（その2）

ー自己理解を目的としたブレインストーミングー

“Group work” the introduction of attempts at social welfare education (part2) : Brainstorming for purpose at self-understanding

安松 耕司

1 はじめに

グループワークは様々な分野¹⁾で定義並びに実践がなされており、その効果が認められている。これらの成果の中で、本稿での「グループワーク」とは、他者と関わることの楽しさや協力して達成する喜びを感じ、多様な価値観と向き合う中で自分自身を見つめ直すことができる自己理解のためのグループワークである。²⁾

先稿³⁾では、生徒たちが他者と関わる楽しさや協力して達成する喜びや問題解決の過程を体験できたことを評価しつつも、生徒の気づきを引き出すためには様々な「フィードバック」の風土づくりや課題を提示する際の適切な「問い」が必要であることが、課題として残された。本稿の目的は、生徒の自己理解を目的としたブレインストーミングの実践を報告することで、その成果と実践過程で明らかになった課題を提示することである。

2 〔実践Ⅰ〕「ブレインストーミング（1）」

演習1「ストレス解消法」⁴⁾

演習2「校庭の隅で、一人で立って下を向いている生徒がいます。その生徒は一体何をしていますか」⁵⁾

1) 実施時期 2015 年 10 月 7 日（水） 6 限
科目「コミュニケーション技術」

2) 対象生徒 「コミュニケーション技術」3

年選択者 女子11名、男子5名 計16名⁶⁾

3) 実施場所 総合学科棟1階 介護実習室

4) 事前準備

(1) 空間的配慮

机、椅子、ホワイトボードを自由に移動できる場所

(2) 時間的配慮

50 分（授業1時間）

(3) グループの編成

4 人一組の4グループ編成

5) 目的

(1) 人の感情や行動の幅に気づく。

(2) ブレインストーミングによって自分の思考の幅を広げる。

(3) 共同作業によって、お互いの協力関係をつくる。

6) 方法

(1) 個人作業

課題に対する答えを8個以上用紙に書く。

(2) 共同作業

個人作業で出した答えをお互いに見せ合い、グループで40個以上用紙に書く。

(留意点1)

なるべく思考を広げていろいろな視点

を探し出す。

(留意点2)

他の人の意見や考えを批判しないで、
刺激や素材として活用する。

最後に、自分の作業への取り組み方について、
気がついたことを「振り返りシート」に自由に
記入する。

7) [実践Ⅰ] の概要

(1) グループ編成

授業の座席は、ホワイトボードに向かって左
からクラス出席番号順に8名2列である。16
名を座席順に前後2人ずつ4人一組の4グルー
プに分けて実施した。授業の座席がクラス出席
番号順のため、生徒は男女で隣り合わせになる
場合もある。選択授業が始まった2年次には、
男女混合のグループで様々な課題について話し
合わせることは容易なことではなかった。先稿
の課題の一つであった、自由に意見交換できる
「フィードバック」の風土づくりについては、1
年半の授業を通して漸く整えられた。福祉の授
業で、様々な介護体験やグループワークの経験
を積み重ねていくうちに、生徒同士でコミュニ
ケーションがとれるようになってきたところだ
ある。

今回は、普段の授業の雰囲気重視して、新
たなグループ編成は行わずにブレンストーミ
ングを実施した。しかし、実際に「グループワー
ク」を始めた際に、男子1名女子3名のグルー
プと女子のグループとを比較してみると話し合
いの状況には大きな差異が見られた。

(2) 課題提示と話し合いを促す工夫

ブレンストーミングでは、たくさんの意
見を引き出すために、回答の質よりも量(個

数)を重視し、個人で8個を目標にワークシ
ートに記入させた。実際に、8個答えられた生徒
は少なかったため、誰か1人が8項目の回答を
記入できた時点から、共同作業(グループでの
話し合い)を開始させた。まず初めに、重複し
ている回答を確認させてから班員それぞれの意
見数を数えさせた。この時点での総数は、目
標40個に対して、15個前後がほとんどであ
った。そこで、生徒の意見交換を活発にするた
めに、似ている内容についても細かく分類して、
回答数を増やせるようにした。例えば、「テレビ
を見る」という項目については、「ただ、テレビ
をつけてその番組を観る」、「テレビで、好
きなドラマを観る」、「テレビで、好きな歌番組
を」、「テレビでお笑い番組を観る」という具合
に、4項目にすることも認めることにした。次
第に、一人一人の嗜好や解釈の違い等について
の意見交換が活発になり出した。話し合いが活
発になってから10分ぐらい経過した後に、各
班の意見の総数を確認した。そして、1つの班
の回答数が40個に到達した時点で話し合いを
終了させた。

演習1は、グループ内の波長合わせに重点を
置いて実施した。生徒がブレンストーミング
の取り組む様子を観察しながら、時間配分等を
修正し、演習2では、生徒が多様な価値観と向
き合い、自由に話し合えるように配慮した。
その後、各グループの代表者が、話し合いで出
されたすべての回答例と回答数を読み上げた。
生徒は、各班の回答を聞きながら、それぞれの
話し合いの過程を振り返り、ワークシートに感
想等を記入した。

8) 演習の回答例

演習1「ストレス解消法」の回答例は下記の通りである。

「歌を歌う」、「音楽を聴く」、「誰かに（話を）聞いてもらう」、「独り言を言う」、「食べる」、「物にあたる」、「深呼吸する」、「愚痴を言う」、「ピアノを弾く」、「ボーっとする」、「外に出る」、「カラオケに行く」、「寝る」、「ゲームをする」、「仕返しを考える」、「動物とたわむれる」、「風呂に入る」、「紙を塗りつぶす」、「買い物をする」、「マッサージチェア」、「運動する」、「読書」、「遠投」、「走る」、「踊る」、「換気する」、「映画鑑賞」、「紙を破く」、「筋トレ」、「サウナ」等

次に、演習2「校庭の隅で、一人で立って下を向いている生徒がいます。その生徒は一体何をしていると思いますか」の回答例は、下記のとおりである。

「仲間はずれ（にされた）」、「蟻を（踏み）つぶしている」、「休憩（している）」、「体調不良」、「一人になりたい」、「考え事をしている」、「ボーっとしている」、「かくれんぼ」、「蟻を見ている」、「雨宿り」、「寝ている」、「泣いている」、「モグラが（土の中から）出てくるのを待っている」、「新しい靴がほしいなと思っている」、「靴下の柄が左右違うことに驚いている」、「地面を見ている」、「一人ぼっちのアピール」、「石を探している」、「探し物」、「影送り」、「糞を踏んだことによる靴の確認」、「一輪の花を見ていた」、「ちっちゃいおじさんがいた」、「日焼けしたくない」、「新生物がいた」、「いじめられた」、「悲しい」、「待ち合わせ」、「一人の時間を楽しんでいる」、「周りとの距離を置いている」、「腰が痛い」、「ウ

ンコを漏らしてしまった」、「靴がない」、「たそがれている」、「ひなたぼっこ」等

9) 振り返り

（1）満足度

「振り返りワークシート」で、「満足度」に該当するものに○をつけさせたところ、「とても満足した」9名、「やや満足」6名、「どちらともいえない」1名、「あまり満足しない」0名、「全く満足しない」0名であった。16名中15名の生徒が、満足したと回答した。

（2）自分の考え方に気づいたこと

生徒の回答は以下のとおりである。

「前より想像力が豊かになっていた気がした」、「ストレスを感じてもすぐに忘れていることに気づいた」、「意外に視野が狭いなと感じました」、「周りの人とほぼ同じ」、「周りの人と違う所があった」、「一般的なものもあれば、人と変わっているものもあった」、「ネガティブ、マイナスに考えることが多いような気がしました」、「あまりおもしろいことが書けなかった」、「発想力が人とは違い何か変」、「心の闇が見えた」、「意見をあげていくたびに、ずれていないか心配になる」、「まじめで堅い意見かそうでない方か迷った」、「変な回答になってきてしまう」、「発想がずれる」、「～があったとかが動物の種類になった」等

この項目をみると、生徒たちが他のメンバーとの意見交換を通して、それぞれの視点から自分と他者の発想の違いや視野の広さなどについての自己確認を行っていることが窺えた。

（3）グループの話し合いで気づいたこと

生徒の主な回答は以下のとおりである。

「考えることが同じものもあったが、全く思

いつかなかったものもあっておもしろいと思いました」、「話し合うと発想がたくさん浮かぶ」、「人それぞれ色々な考え方がある」、「グループ内で意見が違うものがけっこうあった」、「自分が気が付かなかった点を発表し合えて、様々な意見がでた」、「自分では思いつかなかった発想があってよかった」、「みんながみんな違う発想を持っている」等

以上のように、生徒たちは、グループのメンバー一人一人の意見が違うことやグループで話し合うことで様々な意見が出てくることを体験し、確認することができた。

(4) 話し合ってみて、自分の考えが少し変わったこと

この項目については、空欄の生徒が少なくなかったが、以下のような回答もあった。

「こんな考え方もあるのかと色々な発見があったり、視野が広がったりした」、「もっと色々な考え方があるということがわかりました。もっと視野を広げてみることも悪くないと思いました。」、「少し明るい方向に考えられるようになった。」、「突拍子のない意見でも出してみることに、頭をやわらかくすること、考え過ぎないこと」等

生徒の回答の中には、若干名ではあるが、グループの話し合いを通して、自分の発想や視野に気づき、メンバーの意見から刺激を受けて視野を広げることができるようになったと記述しているものもあった。

(5) 自由感想欄

自由感想のいくつかには、生徒自身の自己理解に留まらず、ブレインストーミングを実施することによる学習効果等についての感想も寄せ

られていた。

「(ブレインストーミングは、)話し合うきっかけなどにもなったり、知らない人といろいろな意見交換ができてりするので面白いと思った」

ブレインストーミングは、「グループワーク」を初めて行う場合のアイスブレイキングに最適な内容であり、メンバー同士の緊張をほぐし話し合いをスムーズに進めるきっかけになるということを生徒自身も感じ取っていた。

「人によって、その言葉のとらえ方がそれぞれ違い、意見がたくさんあっておもしろかった」

「いつものみんなとは違い、その人の本質を見た感じがして新たな発見ができました」

用語1つについてもメンバーそれぞれの解釈の違いや様々な意見があり、生徒たちは、新たな発見を楽しんでいる様子が窺えた。

また、入試を控えている生徒は、「近頃は頭を使うことが多いので、ブレインストーミングでガスぬきができたと思います」と、このワークが生徒にとって、気分転換の効果もあることを明らかにしている。

そして、ある生徒の感想は、以下のとおりである。

「自分で考えていく中で、だいたいしていることが行動に表れていると思った。話し合いの中でも、考えて話せる雰囲気良かった」

この話し合いが、自由な雰囲気だと思っていることを自発的に発表できる機会になっていることが伝わってくる。

10) [実践Ⅰ] の成果

この実践の成果は、自由な雰囲気自分が思っていることを自発的に発表できる機会に

なったこと、他の生徒の発言に刺激を受けて自分の視野を広げたり、自分の考えを深めたりすることができたこと、そして、話し合いを通して自分と他者との違いを発見する中で、自己理解を深めることができたことである。また、ブレインストーミングには気分転換の効果があることも認められた。

しかしながら、今回の実践でこれだけの成果が得られた背景には、1年間の授業実践の積み重ねを通して落ち着いた安心感のある授業の雰囲気や生徒の気づきを引き出すための風土づくりが事前に整えられていたことが考えられる。従って、今後は初めての授業でも前述のような成果を得るために、「グループワーク」の指導方法の工夫やプログラムの開発を課題としたい。

3 [実践Ⅱ]「ブレインストーミング（2）」

演習3「介護離職をゼロにするにはどうしたらよいですか」

- 1) 実施時期 2015年10月16日（金）4限
科目「生活支援技術」
- 2) 対象生徒 「生活支援技術」3年選択者
女子5名⁷⁾
- 3) 実施場所 総合学科棟1階 介護実習室
- 4) 事前準備
 - (1) 空間的配慮 机、椅子、ホワイトボードを自由に移動できる場所
 - (2) 時間的配慮 50分（授業1時間）
 - (3) グループの編成 グループは女子5名で編成
- 5) 目的
 - (1) 人の感情や行動の幅に気づく。

(2) ブレインストーミングによって自分の思考の幅を広げる。

(3) 共同作業によって、お互いの協力関係をつくる。

6) 方法

(1) 個人作業 課題に対する答えを8個以上用紙に書く。

(2) 共同作業 個人作業で出した答えをお互いに見せ合い、グループで15個以上用紙に書く。

(留意点1)

なるべく思考を広げていろいろな視点を探し出す。

(留意点2)

他の人の意見や考えを批判しないで、刺激や素材として活用する。

7) [実践Ⅱ] の概要

(1) グループ編成と課題の提示

このクラスの女子5人は、2年間同じメンバーで基本的な介護技術の習得を目指す「生活支援技術」を学んでおり、全員が福祉系大学・専門学校進学、介護職への就職が決定している。生徒達の介護への興味・関心は非常に高く、「介護離職ゼロにするには」というテーマは生徒達にとっては切実な課題である。

(2) 不介入による自己理解の促進

本時の授業展開は、出席確認、課題の提示等の導入（10分）、グループでの話し合い（25分）、発表（5分）、ワークシート記入等の振り返り（5分）、まとめ（5分）である。

生徒達の話し合いは、ブレインストーミング開始早々から活発となり、議論も白熱し激

しさを増していった。[実践Ⅰ]では回答数の量(個数)を重視したが、今回の[実践Ⅱ]では、各自の意見を自由に出し合い、価値観の違いから自己理解を促すため、ワーク開始後は可能な限り、生徒の話し合いに介入せず、自由に議論できるように配慮した。話し合い終了後に回答例を発表させ、ワークシートに振り返りを記入及び提出させた。振り返りの内容は、下記のとおりである。

8) 生徒の回答例

「給料を上げる」、「一人一人にかかる負担を減らす」、「待遇を良くする」、「介護者側のケアもしっかりする」、「職場内の人間関係を良くする」、「施設内をキレイにする」、「楽しいと思える仕事を増やす」、「職員の人数を増やす」、「休みを増やす」、「年に何回か行事(を実施する)」、「(施設内の)臭い(を改善する)」、「イメージアップを図る」、「資格を取りやすくする(キャリアアップシステムの充実)」、「施設の場所」、「施設の規模を大きくする」、「家庭を持っている人への待遇を良くする」、「雰囲気良くする」(17項目)

9) 振り返り

(1) 満足度

「振り返りワークシート」で、「満足度」に該当するものに○をつけさせたところ、5名全員が「とても満足した」と回答した。

(2) 自分の考え方に気づいたこと

「楽しく仕事がしたいし、給料面でも良いところに就きたいのだと思いました」、「人間関係や給料が大切」、「広い範囲で考えることが多い。他の考えを取り入れて終わりがちになる」

(3) グループの話し合いで気づいたこと

「介護に対してのイメージや価値観が似ている部分があって良かった。5人で話し合うと、また違う意見や深い話が出来て良い経験になりました」、「他の人の着眼点がすごい。話し合いでヒートアップしているところに驚いた」

(4) 話し合ってみて、自分の考えが少し変わったこと

「受け身の体勢も大切だけど、介護者である私達だからこそ、色々な意見を言っていくのも大切なのかなと思いました」、「もっと福祉の福利厚生について知りたくなった。実生活についても、もう一度考えたくなった」

(5) 自由感想記入欄

自由感想は、以下のとおりである。

- ・いつも以上に深い話し合いができたし、みんなのそれぞれの意見が聞けたのが、本当に良かった。様々な考え方があって、視野が広がりました。
- ・久しぶりにこんなに考えたというくらいたくさん考えて、意見を言うことができました。介護離職率をゼロにする方法を考えるだけなのに、とても深い話をしたなと思いました。人間関係、休暇、給料だけではなく、周囲からのイメージが変わることも大切だと思います。
- ・介護業界は改善すべきことがたくさんあるとわかりました。なぜ大変な仕事なのに待遇が悪いのか疑問に思いました

た。介護士の方の待遇がもっとよくなれば離職率が下がると思います。

- ・私は今回の話し合いで自分だけでは思いつかなかった意見を知ることができて、とてもためになりました。これから先のことを考えると現実的になるけど、離職率をゼロにするためには色々な改善が必要だと思いました。介護職は大変だけど、その分やりがいのある仕事だと思っているので頑張ろうと思います。
- ・意見をあげていくと、他の人の意見とかぶるところが多く、なかなか数があるがらないように思いました。話し合いがヒートアップする中にうまく参加できるようにになりたいと思いました。これからの自分の将来についても考えてみたいと思います。

10) [実践Ⅱ] の成果

[実践Ⅱ] の成果は、「介護離職ゼロにするためにはどうすればよいか」を5人が真剣に意見を交換し、自分とは違う他者の様々な意見に触れて、自分の視野を広げ、かつ自分の考えを深められたことである。介護職員の低賃金をはじめ、職員不足による業務上の負担の問題、資格取得等のキャリアアップシステムの必要性、介護分野の社会的認知度の低さ等について、生徒達が難題と真剣に向き合い、堂々とした態度で真剣に話し合っていた。今回提示した課題内容が、これから介護職等に進む生徒達の切実な課題ということもあり、生徒達がその課題解決に向けて真摯に取り組む姿勢には頼もしささえ感じられた。生徒の自由感想に「介護職は大変だ

けど、その分やりがいのある仕事だと思っているので頑張ろう」と書かれていたように、生徒達がこれらの課題解決に向けて意欲的に努力を重ねていき、将来の日本の介護をより良い方向に変えていくと確信できたことは、とても大きな成果であった。

それに対して、反省点は、時間的な制約があり、各自が記入した振り返りの内容を、他のメンバーに伝え合う、フィードバックによる気づきの機会を設けられなかったことである。先稿で課題として残された「フィードバック」の風土づくりについては、十分に改善することができなかった。自己開示した内容を他者がどのように受け取ったのかを知ることによって、様々な気づきがあり、さらに、自己理解が深まると考えられる。しかしながら、高校生にとっては、他者の意見に対してどう感じたのかを直接言葉で伝えることは困難なことである。そこで、次回取組としては、各自が記入したワークシートを全員で回覧するような方法から始めて、徐々に慣れてきたところから直接話し合える雰囲気を作っていくように進めていく方法を検討したい。

4 実践の成果と今後の課題

今回、総合学科高校福祉系選択者3年生を対象にブレインストーミングを試みた。この実践における成果は、次の2点である。

第1に、ブレインストーミングが、生徒達にとって自由な雰囲気ですら発的に発表できる機会となり、それぞれの自己開示が、多様な価値観に触れる機会となったことである。

第2に、ブレインストーミングでは、提示す

る課題内容が、生徒の切実な問題であることが大切だということである。生徒達が介護の様々な課題解決に向けての話し合いを通して、様々な気づきが得られたことは大きな成果であった。

そして、今後の課題は、以下のとおりである。

第1に、自由な雰囲気で自分が思っていることを自発的に発表できる、自己開示の機会をつくるとともに、発表した意見を各自がどのように感じたのかを伝える、フィードバックの機会をつくり、お互いに、自己開示とフィードバックを繰り返しながら一人一人の気づきを増やし、それぞれの自己理解を深めさせることである。

第2に、初回授業でグループワークを実施する際の指導方法を改善することである。初めて出会う生徒が和やかな雰囲気で楽しく取り組める「グループワーク」のプログラムを開発することである。

第3に、科目「社会福祉基礎」等の講義科目の各単元の導入時にブレインストーミングを実施することである。各単元の導入時にブレインストーミングを取り入れることで、生徒が本時の課題を知るとともに、生徒の課題に対する問題意識を喚起することができると考えられる。そして、ブレインストーミングを通して、他の生徒の問題意識を知ることができ、学習意欲を大幅に向上させる契機となり、より良い学習成果が得られることが期待できる。

【注】

- 1) 國分康孝 「構成的グループ・エンカウターの意義と課題」(1992) pp.2-13『構成的

グループ・エンカウンター』(1992)

誠信書房

福山清蔵 「グループワークの場所」(2009)

pp.2-24『生のリアリティと福祉教育』

誠信書房

丹治光浩 「学校教育におけるグループワークの方法と課題」(2013)『花園大学社会福祉学部研究紀要 第21号』pp.111-117

- 2) 安松耕司 「福祉教育における『グループワーク』導入の試み」(2012)立教大学教職課程『教職研究 第22号』pp.111-117

3) 同上 p.111

- 4) 諏訪茂樹 「ブレインストーミング」『対人援助のコミュニケーション』(2010)中央法規 pp.163-164

- 5) 福山清蔵 「感情と行動のブレインストーミング」『カウンセリング学習のためのグループワーク』(1998)日本・精神技術研究所 p.25

- 6) 埼玉県立滑川総合高等学校は、2005年度に改編され11年目を迎えている。本校には、生徒の進路希望に応じた6つの系列があり、その一つ「健康スポーツ系列」の中で、介護福祉系の講座を開講している。その開講年次・講座名(単位数)は、2年次「社会福祉基礎」(2単位)、2・3年次「介護福祉基礎」(計4単位)、2・3年次「生活支援技術」(計4単位)、3年次「コミュニケーション技術」(2単位)、3年次「こころとからだの理解」(2単位)である。

本校は総合学科のため、専門高校のような介護福祉士を視野に入れた専門教育は行っていない。本校福祉科では、介護に興味・関心がある

生徒を対象に介護に関する基礎的な知識と技術を習得させることと生徒一人一人に各自の進路適性を確認させることをねらいとしている。

また、本校では介護福祉系科目を中心に履修している３年生を対象に介護職員初任者研修を実施している。この研修には介護等の資格・実務経験等を有する講師要件が課されているため、経験豊富な講師陣に授業をお願いしている。生徒達の介護現場での体験は夏休み中に２日程度と限られているが、生徒達は、通常の授業で現

場経験豊富な講師の方々から最新動向や専門的な知識と技術を学んでいる。

この介護福祉系科目を中心に履修している生徒の進路状況（2015年度）としては、約６割の生徒が福祉系の進路を選択しており、２割が看護・医療・美容系に進学し、残りの２割が介護職以外の分野に就職している。

- 7) 科目「生活支援技術」は実技科目のため、施設設備の制約上２講座に分けて少人数の授業を実施している。